

ねこまるの珈琲飲んでる場合だよ。

ねこまる

0

朝、起きる。時計を見る。十時十五分をさしている。今日はニコマあったなあ……と頭の片隅でグルグル回しながら、次には急いで用意を始めるだろう。

心に余裕がなくなったときこそ、落ち着いて電気ケトルのスイッチを入れよう。ミルを回しながらお湯を待っているうちに、ニコマは始まってしまふ。しかし、茶色の粉末にお湯を注いで、それがぶっくりと膨らんでくる頃には、

焦りはどこかへ去っていったことに気づく。

密やかな楽しみと安堵とが混ざり合って、一言、
「珈琲飲んでる場合だよ。」

1

朝、起きる。眠い。もう学校行きたくないよ……そんなときには、上質なモカを一杯。芳醇なその香りが、きつい坂を登る原動力。モカは酸味の強い珈琲。苦味の強い珈琲よりも、実はカフェイン量が多い。酸味と苦味のバランスは、焙煎の深さが関係していて、焙煎を深くすればするほ

ど、カフェインは失われるらしい。だから、朝の体を起す一杯として、僕はモカを強く勧めたい。コーヒの苦味が苦手な人でも、きつと楽しめることだろう。

モカのある朝には新聞がいいだろう。社会の動向を目で追いながら、社会と一時疎外された自分を感じて飲む。ちよつとした知識人気取りも、心休まるはずだ。ゆつたりとした時間の中で、日々他人と比較し続け、磨耗してしまふ優越感を回復するといふ。それは決して恥ずべきことではないから。

2

休日の朝には喫茶店を選ぶのもいい。僕の地元では、モーニングの文化が強く根付いている。朝の時間に喫茶店に行くと、バターを塗った厚切りトーストと、ゆで卵が付いて来るのだ。これが定番の組み合わせなのだが、喫茶店によってモーニングの内容は変わってくる。サラダが付いてきたり、卵がスクランブルエッグだったり、時にはホテルのビュッフェに劣らないプレートが運ばれてきたりするのだ。

高校時代、貧乏学生の幸福な日曜の楽しみが、よく通っ

ていた喫茶店のモーニングだった。そのモーニングは特段変わったものではなく、変わった珈琲を出していたわけでもないのだが、僕はそこが妙に気に入っていた。僕はテーブルにつくと、モーニングを待ちながら、アイデアノートを開いていた。何も思いつかない日もあった。それでも、この時間は僕にとって大きな意味があった。

喫茶店は空気を楽しむものだ。もちろん、マスターが淹れてくれた一杯は美味しいし、モーニングもあればなおいい。しかし、それ以上に喫茶店の持つある種の厳しき、香り、加えて閉鎖的なコミュニケーションの心地よさが、僕を惹きつけるのだろう。

3

夏の情熱的な太陽は、僕の情熱まで吸い取っていく。外に出る気もついでに持って行かれたように、クーラーのきいた部屋でごろごろ。そんな日もいいが、これが毎日続いてはたまらない。外に出よう。そう決意して作る一杯、アイス珈琲。豆はできるだけ深煎りで、苦味の強いものをセレクト。いつもより多めに挽いて、氷をいっぱい入れたグラスの上に、ドリップパーをセット。少しずつ抽出していく

と、氷が溶ける小気味いい音が聞こえてくる。抽出を終えたら、少し熱の残るグラスをステア。これで完成。ぐっとくる苦味がどうも苦手という人は、ガムシロップをどうぞ。甘いシロップが透明な氷にかかる様を、想像するのも気持ちいい。

このようにオン・ザ・ロックで作るほか、水出しという抽出法もある。大きな砂時計のような器具に、挽いた豆と常温の水をセットすると、水が少しずつ豆に滴下して、ゆっくり、ゆっくり抽出されるのだ。抽出後の珈琲は、氷を入れて飲むのもいいし、パンで温めて飲むのもいい。時間をかけて飲むでも、ほかの抽出法と比べて風味が損なわれづらい。器具が高価なのが難点ではあるが、きっと珈琲の楽しみを広げてくれることだろう。

ここで、台湾で出会った水出し珈琲を提供してくれる喫茶店の話をしたい。今年の二月から三月の間、僕は語学研修にかこつけて、台湾に滞在していた。台北の繁華街である西門の駅近くにある老舗の喫茶店。店内に入ると、まずボディの強い深煎りな豆の香りが、僕の鼻に飛び込んできた。その強い珈琲の香は、店内の至る所に置いてある、大

型の水出し器具から放たれたものと分かった。その空気に圧倒されながら、カウンター席に案内される。木珈琲、黒的！「アイス珈琲、ブラックで」と、適当な中国語で何度もオーダーすると、店員さんは右手を出してきた。どうやら、先払いらしかった。

僕は結局、台湾での三週間のうちに、この喫茶店に六度通った。僕を惹きつけたのは、まるやかで濃厚な水出し珈琲だった。とろみすら感じる抽出液を口に含むと、しっかりとした苦味が脳を刺激する。それは長い時間をかけて、ゆっくりと抽出する水出しだから生まれる味わいだった。

4

珈琲、特にホットは風味が損なわれるのが早い。抽出後十分も飲まずにいたら、豆の特色すら分からない、ただの苦い水になってしまう。しかし、焦って飲んでも味の深みを楽しむ余裕がなくなってしまうし、喉を焼いてしまうかもしれない。ゆっくりと少しずつ、そろそろと歩をすすめるように飲もう。珈琲のある空間を楽しんでいたなら、冷め切ってしまうまで放置することはなくなるだろう。

珈琲は精神的なゆとりではなく、時間的なゆとりも

くれる。いわゆる「コーヒー・ブレイク」だ。時間の中心に珈琲があれば、どんな憂鬱なことも考えずに済む。もしくは、とるに足らないことだったと思えるようになる。身体をオフにする時間を、珈琲が作り出してくれるのだ。孤独な一息でも、安堵に変えてしまう魔力。珈琲には、その力がある。

豆の香りに、豊かな苦味に、身体を委ねるのだ。

ほら、楽園はここにある。